# 複数の校内別室支援員の配置

## 不登校生徒の状況

中学校入学時には、通常どおり登校していたが、夏季休業明けから欠席が目立つようになった。保護者からは当該生徒が友人との関係を改善し、安心して学校生活が送れるようにしてほしいとの相談があった。

## 具体的な取組

○校内別室の支援

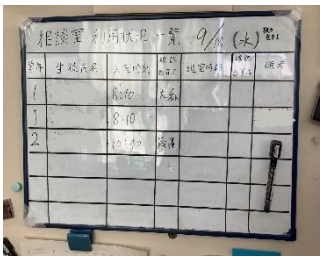
教育支援センターへ通所することや、教室に戻るために一時的な支援の場所として別室を設置し、心の問題等をかかえた生徒にカウンセラーなど、専門的知識をもつスタッフと連携して対応している。

○校内別室支援員による支援

複数の校内別室支援員が勤務しており、様々な支援員の対応を受けることができる。支援員は学習の見守りや生徒との会話等を行う。校内別室の隣にはカウンセラー室もあり、ＳＣと連携をしながら対応を行っている。

○校内別室を利用する生徒の情報共有

生徒に関する個票を作成して、遅刻、早退、欠席日数、その原因の把握に活用している。個別の支援計画を立てて、校内別室支援員にも情報を共有している。また、その日に校内別室を利用している状況をホワイトボードに記入して教職員間で共有している。



○学習計画表の作成

校内別室を利用する生徒は、別室のホワイトボードに何をするか記入をして校内別室支援員にその日の学習計画を共有する。

## 成果

複数の校内別室支援員を配置したことによって、校内別室を利用する生徒に対して様々な支援員が関わって支援をすることができている。当該生徒は、教室に入ることができるようになった。

## 課題

不登校の生徒に対して多様な対応方法を検討するとともに、魅力ある学校づくりを目指し、不登校を生まないような体制をつくる。

# 校内別室を活用し、安定した登校へ

## 不登校生徒の状況

対象生徒は、小学校在籍時から不登校が続き、第１、２年生のときは教室に入れないことが多く、欠席日数は年間で 100 日以上続いた。

保護者とは、なかなか連絡が取りづらい状況であった。

## 具体的な取組

○個別最適化を目指した空間づくり

一人で静かに過ごせる個別ブースや、複数人数で共同作業ができる大きめのテーブルなど、個別最適化を目指した空間を実現できるように工夫している。

○組織的な別室運営体制

朝から６校時終了時間まで、２人体制で組織的に校内別室が運営できるように、支援員同士の連携も確立してきている。

○児童自らが建てる別室利用計画

ホワイトボードに利用生徒自身がそれぞれ自らの予定を立て、校内別室で学習用個別端末を用いた学習や授業参加など、計画的に取り組んでいる。

○引継ぎノートを活用した支援の継続

個々の支援員が、それぞれ引継ぎノートを作成し、継続した支援ができるよう心がけている。

## 成果

年間 100 日以上の欠席をしていた不登校生徒が、校内別室に登校できるようになり、年間の欠席が 11 日に減少した。

## 課題

不登校生徒の特性や事情は、個々で異なっており、人数の増大に伴うトラブルの回避や、個々の課題に合う過ごし方の工夫などが課題である。

# 校内別室の環境整備
# 支援員を常置して毎日別室登校ができるようにする

## 不登校生徒の状況

対象生徒は、学校や集団生活になじめず、クラスで過ごすことが苦手である。校内別室で学習することに問題はない。保護者が登校をさせたい気持ちが強い。学校に行くことを条件として、家での過ごし方に関して寛容にしている側面もある。

## 具体的な取組

○友達との関係づくり

年度の初めに、新入生の対面式を企画し、上級生が新入生を温かく迎え入れるようにしている。道徳の授業では、なるべく対話場面を設定して、友達の考えを聞き、自分の意見を安心して発信する活動を設けている。また「意見箱」を各学級に設置して、生徒の意見が生徒会本部に集まるようにしている。

○校内別室支援員の常備配置

今年度から校内別室を開室し、校内別室支援員を配置して、いつでも校内別室を利用できる環境を整えた。担任や学年の教員も校内別室を利用する生徒に給食を届け、連絡事項を伝えにいくようにして教職員全体で生徒を支援する体制を整えた。

○デジタル機器を活用した支援

タブレットを使用した動画学習の環境を整備した。学習項目を一覧化して掲示し、学習内容の見通しを立てられるようにした。また、動画の学習プリントを整備していつでも取り組むことができるようにした。

○学校外の公的機関等との連携

支援会議で情報共有を行い、必要に応じて SSW や子ども家庭支援センターなどと連携をして、生徒を支援する体制が整っている。

## 成果

校内別室を開室し、環境を整備することで、当該生徒は毎日別室への登校ができるようになった。また、校内別室支援員と良好な関係を築くことができたのも一因であると考える。

## 課題

魅力ある学校づくりを強化することで、学校に通いたい生徒を増やすことや、休みがちの生徒に対して早期の支援をしていくこと。

# 部活動をきっかけに　夏休み明けから教室復帰

## 不登校生徒の状況

　対象生徒は、周りの目が気になり、集団生活が難しい。保護者は当該生徒の教育活動に協力的であり、学校とも連絡を円滑に行っている。

## 具体的な取組

○支援会議の開催
　毎週１回支援会議を実施し、生活指導主任が中心となり管理職や各学年担当、養護教諭、SC、不登校対応巡回教員が参加している。学年ごとに長欠生徒全員の状況を報告し、生活指導主任等の助言を踏まえ、職員間で差異のないように対応方法の共有化を図っている。

○学校が全生徒の居場所となる取組
　教室では、全ての生徒にとっても落ち着ける環境にするために、テニスボールを全ての机とイスに装着し、騒音を防ぐ環境にしている。また、生徒が希望する教職員と面談をする場を設定することで、全ての生徒が安心して登校できるような学校づくりを行っている。

○別室対応による不登校生徒の支援
　今年度から校内別室を開室し、利用を希望する生徒がいる場合は、いつでも別室登校ができる環境を整えた。学校の支援をした経験がある方を校内別室支援員として配置するように校内体制を整備した。

○生徒同士の関係づくりの推進
　生徒が互いの良さを認め合う学級をつくるために、道徳の授業において人を好きになるため、人の良いところを見付けて上手に褒める経験をする授業を行っている。

## 成果

　当該生徒は、夏休み前から教室復帰を目指しており、担任や部活動担当の教員によって、教室復帰に向けて声掛けによる支援を行うことにより、登校に慣れて部活動に参加することができ、夏休み明けに教室復帰することができた。

## 課題

　当該生徒が教室に継続的に登校できるように学習支援を行い、必要に応じて相談できる環境を整備していく。

# 校内別室支援員による支援の取組
# 不登校対応巡回教員との連携

## 不登校生徒の状況

対象生徒は、仲のよい友達とうまくコミュニケーションが取れなくなり、欠席日数が増えた。自分の思いを伝えることができず、人前に立つのが苦手な生徒である。

## 具体的な取組

○校内別室の対応

校内別室には個別ブースやオープンスペースを設けて、学習や会話をする場をつくった。

○校外の教育支援センターとの連携

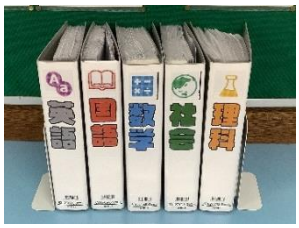
校内別室で利用できる学習教材を教育支援センターから助言を受け、校内別室で利用した。校内別室を利用している生徒で校外での学習環境を希望する生徒に教育支援センターの利用を勧めている。

○ＳＣとの連携

校内別室の設置場所は、ＳＣの相談室の隣に設置されており、生徒がＳＣとの会話が終わった後に校内別室に入室して学習をしたり、給食を校内別室でＳＣと一緒に食べたりしている。

○個別の動画学習

授業動画を見ることができる。各科目のプリントをファイリングし、必要なものは支援員に印刷をしてもらえる。学習項目を一覧化して壁に掲示し、学習の見通しがもてるようにしている。




## 成果

当該生徒は、校内別室を利用しながら、学校行事に参加をし、教室復帰することができた。校内別室支援員が間に入りながらではあるが、友達と話すことができるようになった。

## 課題

欠席が増えた段階で校内別室を利用して、一時的な落ち着ける場所として校内別室を利用できるようにしていく。

# 校内別室での支援

## 不登校生徒の状況

対象生徒は、学力が低く、個別の支援が必要である。また、教員との接し方が分からず、同級生の生徒に会うことへの不安から欠席が続いている。

## 具体的な取組

○一緒に学習

校内別室では、基本的には生徒が自学自習をするが、校内別室支援員は見守りをするだけでなく生徒と一緒にドリルの問題を考えるなど、「生徒がやりきる支援」をしている。

○動画学習

タブレットを使用して、オンラインで生徒が学習できる環境を整備した。学習に応じたプリントを校内別室支援員が印刷して生徒に配布している。

○給食の時間から登校へ

教育支援センターがあり、そこに通う生徒が午前中は教育支援センターに行き、給食の時間から登校して午後も校内別室を使用することもできるようにした。

○校門でのお迎え

生徒の登校時間を決めて、校門で校内別室支援員が待ち合わせをして、校内別室まで一緒に登校をすることができる。周囲が気になる生徒が安心して継続的に登校できるようになった。帰宅する際も正門まで見送りに行っている。

## 成果

当該生徒は、校内別室に登校する日数が増え、教室で定期的に給食を食べ、一部の授業にも参加をすることができた。また、同級生の生徒とも会話をするようになり、進路に向けた学習にも前向きに取り組んでいる。

## 課題

校内別室を使用できていない生徒の対応を充実させる。巡回教員が保護者面談等を実施するなどして対応していく。

# 自己肯定感を高めて教室復帰へつなげる

## 不登校生徒の状況

対象生徒（第１学年）は学習への取組と集団への参加に不安が強く、小学校５年次から不登校であった。中学校入学後の数日間は教室で過ごすことができたが、入学の翌週から登校しぶりが始まった。４月から校内別室の利用を開始し、特別支援教室を利用しながら、ほぼ毎日、朝から給食の時間まで学校で過ごすことができている。

## 具体的な取組

○別室の利用開始までの流れ

1 学年会での検討
2 不登校対策委員会で検討
3 担任から保護者への提案
4 校内別室の利用体験
5 保護者と面談し利用のルールを確認
6 利用申請書の作成・受理
7 不登校対策委員会で検討・承認
8 校内別室の利用を開始

○学習支援の充実

校内別室指導支援員が一緒に教科書を読んだり、授業のワークシートに取り組んだりしている。また、個別最適化された学習を実現するために、ＡＩ型教材を取り入れている。

○他生徒との交流支援

生徒が給食を運んでもらう際に、会話を交わしたり連絡事項を伝えたりする等、在籍学級の生徒との交流支援を行っている。

また、休み時間には、校内別室を利用する他生徒とのコミュニケーションを促している。

○その他

・登校時には当該生徒の心身のコンディションと一日の予定を確認するようにして、下校時には振り返りを行うようにしている。
・コミュニケーションに課題が見られるため、担任だけでなく、特別支援教室の巡回指導教員や専門員とも連携を図って指導・支援を行っている。

## 成果

当該生徒の他にも、校内別室の利用により学校で過ごすことができている不登校傾向の生徒が５人いる。校内別室を利用しながら、在籍学級の学活や授業への参加を試みている生徒もおり、教室復帰への足がかりともなっている。

## 課題

・生徒の特性や実態に応じた、多様な支援
・支援員と教員が連携しやすい校内体制づくり